

「堀川」界隈

山口 英一

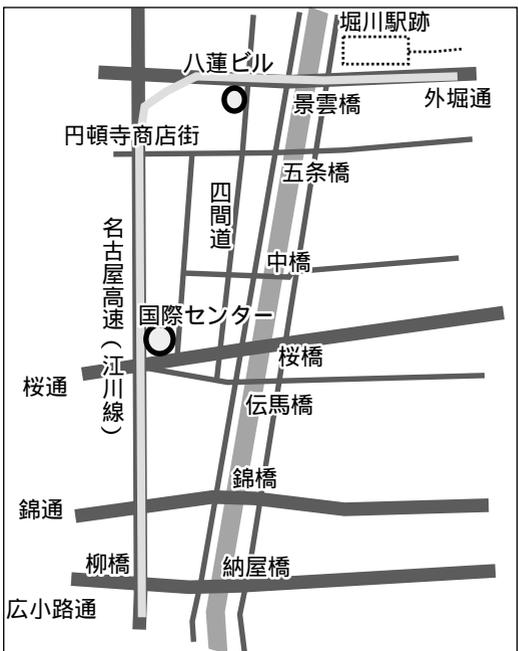
この七月三十日で、名古屋支社が国際センタービルに入居して満二十年になった(という)ことは、国際センタービルが竣工して二十年ということでもあるが……。そこで、今回は支社の周辺のことについて書いてみようと思う。

その前に、名古屋という町の成り立ちを振り返って見ると、この街は人工的に作られた街であった。天下分け目の「関が原」に勝利し、慶長八年(1603)江戸に幕府を開いた徳川家康も、まだまだ、その権力は磐石ではない。大阪に勢力を残している豊臣方への押さえとして、彦根城、駿府城に続いて、慶長十五年(1610)に加藤清正ほかの諸大名に名古屋城の築城を命じた。当時、尾張地方の中心は名古屋城から北西へ六キロほどの清洲が中心であったが、家康は、清洲ではたびたび洪水を起こす五条川があり、水攻めを受ける危険があることを警戒し、更には有力大名の力を削ぐことを目的として名古屋城築城を命じたといわれている。築城にあわせて、清洲から町ぐるみの引越「清洲越し」が行われ名古屋の町が誕生した。

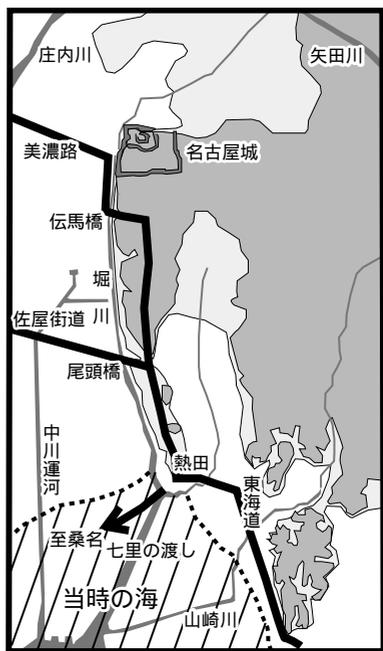
町を維持するには物流ルートの確保が何より大事になってくる。トラックなどの無い、かの時代は、大量の物資は船で運ぶ

る。上流から五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、尾頭橋である。

このうち、伝馬橋は名古屋と中山道の垂井宿を結ぶ美濃街道が通っており、尾頭橋は東海道の脇街道(今のバイパス)で、熱田から佐屋を通り桑名まで続く佐屋街道が通っていた。どちらも大名行列など、多くの旅人が通り、にぎやかな橋だったことであるが、現在、伝馬橋は、すぐ北側に架けられた桜橋にその地位を譲り今では人通りもまばらと言つてよい感じの橋である。



名古屋支社周辺地図



名古屋の地形

しかない。そもそも名古屋城の普請のためにも水運は欠かせないものであった。このため地元出身の大名・福島正則を総奉行として、名古屋台地の西にそって、お城から当時の海岸であった熱田まで運河が開削され、これが堀川となった。堀川は名古屋城の建設と同じ時期の慶長十五年(1610)に掘り始められ、半年あまりで完成したと伝えられている。(一説では元となる川があったとも伝えられるが……詳細は不明)

堀川は、名古屋城南西隅の巾下門の近くから始まり、碁盤割りの城下町が設けられた名古屋台地の西に沿って、広井、日置、古渡を経て熱田の海に注ぐ、長さ約六キロ、幅二十〜二十七メートルの川であった。

堀川ができた頃にかげられた橋は「堀川七橋」とよばれてい

ところで、現在では、大きな橋が架けられている桜通、錦通は昔からあったのではない。あつたとしても、ごく小さな道で、橋は架かっていなかった。調べてみると、まだ百年も経っていない。桜通は、昭和十二年に新装オープンとなった国鉄・名古屋駅にドッキングするよう建設された通りで、その名称は、公募により決められた。命名後、道の両側に植えられた桜の木が多くは車の排気ガスで枯れてしまつて、現在では殆ど残っており、むしろイチョウが目立つ通りである。

しかし、縁というものは何がどう作用するか分からないもので、昨年名古屋から東京へ転勤になったK君が好きな名古屋一のネオン街「錦三(きんさん・錦三丁目)」は、このときの桜通、桜橋の命名が無かつたら存在しない地名であった。というのは、この錦という地名は、昭和二十九年に名古屋で最初の地下鉄工事(東山線)のため、地上の建物を取り払ったことによる跡地利用の形で作られた道が「錦通」と命名されなければ、無かつた地名だからである。つまり「錦」という地名は錦通から名付けられ、そして錦通は、堀川に架かる橋が「錦橋」と名付けられたことにより命名されたという事情がある。問題は、なぜ「錦橋」と命名されたかであるが、実は、古今和歌集にある、

見わたせば

柳桜を こきまぜて

都ぞ春の 錦なりける (素性法師)

から名づけられたという。実に粋なネーミング方法だが、何故この古歌が出てくるかというと、北の「桜橋」と南の広小路通

と江川線が交わるところの地名「柳橋」にちなんで名づけられたのである。従って、昭和十二年に「桜橋」の命名がなければ、「錦三」は存在しなかったという訳である。

さて、堀川七橋の話に戻ろう。七橋のうち五条橋と伝馬橋は清洲の五条川にかけられていた橋を名古屋に運んできたと思えられている。その証拠に、五条橋の擬宝珠（ぎぼし・橋の欄干の先についている葱坊主のような形をした物）には「慶長七年（1602）」と刻まれている。堀川がつくられたのは慶長十五年（1610）の筈だから、それより八年



五条橋

も前の年号が刻まれているというところから、清洲から運んできたことが判るといふ訳である。

五条橋はその後何度も架けかえられたが、現在のものは、市内ではめずらしい石の欄干の橋になっており、複製された擬宝珠（本物は、名古屋城の博物館で収蔵）が取りつけてあって、昔の雰囲気

を伝えている。五条橋は、名古屋市の都市景観重要建築物にも指定されている。

五条橋を西へ渡ると、そこから、かつて名古屋でも三指に入る繁華街といわれた円頓寺商店街が続く。円頓寺は、名古屋の街ができて間もなくの承応三年（1654）創建の日蓮宗の寺である。

創建当時は、現在の国際センタービルの北隣といった地にあつたらしいが、享保の大火（1724）により現在地に移転したとのことである。今ではすっかり寂れた商店街となつてしまつたが、この中にある「西アサヒ」のコーヒーは、三五〇円で、支社の周辺界隈では最も旨いコーヒーだと個人的には思っている。時にはランチでコーヒーが付く店に行つても、ここのコーヒーを飲みたくなつて、つい立ち寄つてしまふほどである。店の椅子は、昭和二十年代から使っているのではと思える古ぼけたものであるが、コーヒーの味にマスターの



円頓寺商店街

心意気を感じる。いつまでも残っていてほしい喫茶店だ。

五条橋を西へ渡つて円頓寺商店街のアーケードに入らずに二つ目の筋を南に下ると、そこが四間道である。四間道と書いて「しげみち」と読む。「この道は元禄大火（1700）のあとに、防火のために当時としては広い四間（7・2m）の幅に広げられたことからこの名がついたといわれている。



四間道に立ち並ぶ蔵

この町には清洲から引越してきた「清洲越しの商人」とよばれる豊かな人たちが多く住んでいた。堀川と城下町に近いこの場所は、商売をするのに便利で、四間道の東側には蔵が、西側には民家が建っていて、堀川を船で運ばれてきた商品は、川岸や四間道の東側に立ち並ぶ蔵に入れ、商人は西側の家に住んでいた。

蔵の石垣のデザインは少しずつ違つていて、蔵の持ち主や作つた職人の個性があらわされていて、何となく粋で美しい。また、この付近には名古屋

特有の屋根神様をまつる社がいくつもあり、戦火にあわなかつたので今も古い家が続き、下町の雰囲気を残した、市内では数少ない場所となっている。四間道の周辺は、昭和六十一年（1986）に「町並み保存地区」に指定されている。

冒頭、名古屋支社が国際センターに入居して二十年と書いたが、そもそも三十四年前の、昭和四十五年九月に名古屋支社が最初に開設されたのは、この四間道を北に行つて、名古屋城の外堀沿いに走る大通り（外堀通）に出たところにある、八蓮ビルである（「セノ二十五史」上巻一三二ページ以下参照）。

当時は、事務所の北側の窓から名古屋城の天守閣も見えたのではと思われるが、現在は大通りの上を名古屋高速が走り、眺望が遮断された形になっている。八蓮ビルの往時を知る人は社内でも林力夫副会長ぐらいかも知れないが、一階に宝石店が入



四間道西側の古い民家、後ろの建物がセンタービル

り、健在なビルの姿を眺めると、久しぶりに親戚の叔父さんに会って、「まだまだ、現役だ」と言われた時のような、なんとなく「ホッ」とした気分になる。

ところで、愛知県の北東に位置する瀬戸は、昔から皿や茶碗などの陶器を多く生産して、陶器の代名詞にもなっていることは周知のとおりであるが、実は、そのことにも堀川が深く関わっていたのである。

明治五年、新橋・横浜間に日本で最初に鉄道が開通し、明治



八連ビル

は基本的には、堀川の水质を調査し、途中で庄内川から試験導水された効果を川の上・中・下流の各地域で確かめると言うものであった。庄内川あるいは木曾川から引かれた木津用水などから水を引くには、各自自治体、国土交通省、農林水産省その他の様々な水利に関する利害等を調整しなければならず、一朝一夕には出来ない複雑な問題がかかわっているらしい。しかし、今では中流となった熱田には熱田神宮のみならず、源頼朝生誕地もあり、また、河口には名古屋港水族館も作られ、名古屋城だけでなく川の流域全てが観光資源に十分なりうるものもある。実は、頼朝が名古屋で生まれたということは、堀川千人調査隊のイベントに関連して堀川を遡ってきた「水上武者行列」を納屋橋の船着き場で見るとはまったく知らないことだった。

堀川を開削した福島正則を始めとする堀川ゆかりの武将たちの仮装行列に混じって、「由良御前」と書かれた立て札が掲げられていた。家に帰って調べてみると、平安時代、熱田大宮司・藤原季範の娘由良御前が源義朝の正室となり、身ごもって久安三年（1147）熱田にある実家の別邸で頼朝を産んだと伝えられている。

いつの日にか堀川の浄化運動が実を結び、国際センター近くの船着き場で、屋形船に乗り、隅田川の花火ならぬ名城公園あたりの花火大会を水上から眺める日が来ないものかと願う今日この頃である。

（名古屋支社 管理部長）

二十二年（1889）には東海道線が東京から神戸まで全線開通した。その後、名古屋市内や周辺でも鉄道が次々につくられた。また、船で荷物を運ぶ海運も盛んになり、明治四十年（1907）には名古屋港が外国と貿易ができる開港場に指定された。

このようなか、明治四十四年（1911）に瀬戸電気鉄道（現在の名鉄瀬戸線）の瀬戸から堀川までが開通し、今の景雲橋のもとに堀川駅が設けられた。この鉄道は、乗客を扱つより、瀬戸からの陶器を運び出し、堀川で待つ船便で全国へ、いや世界へ積み出すことが主目的だった。従って、堀川が無ければ、「瀬戸物」という言葉は、これほどまで普及していなかったかも知れない。残念ながら鉄道貨物が衰退してきた昭和五十一年に、名古屋城の外堀を走っていた部分が廃線となり、代わりに市の中心街「栄」へ乗り入れるとともに堀川駅はなくなってしまった。八連ビルに支社があった頃は、堀川駅が残っていた頃で、この瀬戸電を使って通っていた社員もいたことだろう。駅の閉鎖とともに円頓寺界隈の賑わいも失われ、堀川の水運も廃れてしまった。

名古屋城とともに四百年、名古屋の街を支えてきた堀川であるが、東京の隅田川、神田川と同様に一時は市民から全く忘れ去られ、悪臭を放つドブ川と化していた時代もあった。しかし、最近では、「堀川ライオンズクラブ」なども結成され、堀川の浄化を目指す市民運動も盛んになりつつある。実は、前回紹介した「末喜」の常連さんに誘われ、ライオンズクラブが主導した「堀川千人調査隊」という運動に何回か加わってみた。運動



由良御前